

Dialogue 8

 **EAA Booklet - 22**

East Asian Academy For New Liberal Arts
Joint research and education program
by The University of Tokyo and Peking University

Hisao Miyamoto × Takahiro Nakajima

[宮本久雄 × 中島隆博 2021年3月31日]



EAA Dialogue 8



EAA Booklet - 22

East Asian Academy For New Liberal Arts
Joint research and education program
by The University of Tokyo and Peking University

Hisao Miyamoto × Takahiro Nakajima

[宮本久雄 × 中島隆博 2021年3月31日]

E A A

Hisao Miyamoto × Takahiro Nakajima

[宮本久雄 × 中島隆博 2021年3月31日]

Contents

序 中島隆博（東アジア藝文書院院長）	1
対談 宮本久雄×中島隆博	2
対談の後に	39
時に適う出会いは幸 ^{さきは} ふ（宮本久雄）	39
宮本久雄先生への学恩（中島隆博）	41
対談者について	43

序

中島隆博（東アジア藝文書院院長）

2019年に発足した東アジア藝文書院は、東アジア教養学という来るべき学問のために、その成果を積極的に刊行していこうと考えています。ここにお届けするのは、EAA ダイアログと銘打ったシリーズです。

ダイアログとはプラトンに由来する概念で、dia-logos すなわち「ロゴスを通じて」という古い意味を有しています。そして、その「ロゴス」には、言葉や論理に加えて、万物の根源や批判的な切断という複数の意味が重層的に交差しています。東アジアの概念に翻訳をするならば、おそらく「道」や「文」ということになるでしょう。「道」は語ることであり根源でありますし、「文」もまた言葉であり切り分けられたパターンであるからです。重要なことは、ダイアログは誰かとともに対話を行い、お互いにロゴスを吟味しあって、新しい地平を開こうとすることだと思えます。

EAA ダイアログは、東アジア藝文書院に集っていただいた方々との対話から生まれています。読者のみなさまには、そこに込められた学問への思いや望みを受け止めていただければ幸いです。何ができるかだけでなく、何を欲するのかが、来るべき学問にとってはどうしても必要なことだからです。

COVID-19のパンデミックがあぶり出したのは、「既知」の諸問題でした。それらはすでにわかっていたにもかかわらず、様々な理由から「できない」とされてきたものです。来るべき学問は、そうした「既知」の枠組みを乗り越えるために、真に「未知」なるものに触れる責任があると思えます。

EAA ダイアログを通じて、ともに「未知」なるものを思考したいと思います。

Hisao Miyamoto × Takahiro Nakajima

[宮本久雄 × 中島隆博 2021年3月31日]

幼年時代の風景

中島 きょうは宮本久雄先生をお迎えしてEAA ダイアログを始めたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

宮本 こちらこそよろしく願いいたします。

中島 EAAのダイアログでは、まず先生の幼年時代の思い出から伺うことになっております。ヴァルター・ベンヤミンの『ベルリンの幼年時代』を少し思い出しながら、やってみたいと思っているのです。先生は新潟県の高田にお生まれですね。

宮本 ええ。旧高田です。

中島 どういう幼年時代をお過ごしだったのでしょうか。

宮本 私はこないだ小林康夫さんとちょっと話をしていて、心に浮かんできたのが幼年時代というか胎児時代ですね。

中島 胎児時代！

宮本 そう、お母さんのおなかにいたとき。あのときは新潟にいて、おやじが警察署長か副署長をやっていました。私は昭和20年2月生まれで、戦中派なんです。

中島 そうですね、最後の戦中派ですね。

宮本 最後のほうです。だから、昭和20年の8月に、広島、長崎の原爆投下があったんですが、新潟も原爆投下のターゲットにされていたんです。空襲がものすごく激しい時代です。空襲が始まると、おやじは市

内の治安とか見回りに出掛けていって、母親が私を身ごもったまま防空壕に行くわけです。夫から離れて孤独の只中で、サイレンが鳴る。爆撃機がやってきて、ズドンズドンと爆発音がする。その時の母親の感情というのは、もちろん不安とか恐怖なんでしょうけれども、やっぱり夫から離れて孤独で、もう世界が終わるんじゃないかというような絶望なんです。そういう意味で、私は、終末というか世界が没落するというような感情を、母親から受け継いでいるんじゃないでしょうか。その感情が私の存在の底に基本的なものとして伏在している。ずっと成長して海外で遊学し帰国後に、日本中いろんな旅をしました。日本の自然の美しさの中で、芭蕉とか西行とか山頭火というような、ああいう詩人たちが旅することによって開いていった、何か精神的な風光を私は見ていたんです。

ところが東日本大震災で津波がやってきて、原発が暴走して、自然が廃墟になりましたよね。あのときに私を感じたのは、東北の廃墟で日本全体が廃墟になったという印象です。おそらく私が持っている世界崩壊観みたいなのが作用して、日本全体が廃墟となった。だから、今まで日本の自然の中で良寛みたいに日本人は共存して、山川草木と一緒に生きてきた、そういう自然観がひっくり返っちゃったんです。それがいまだに続いているんです。

それが一つです。それからもう一つ、私のおじがBC級戦犯で、シンガポールのチャンギ刑務所で絞首刑になった。

中島 そのことは『パウロの神秘論』の中でも触れていらっしゃいますね。
宮本 ええ。それは、泰緬鉄道というのを日本が造ろうとしましたよね。おじが、タイ（シヤム）の捕虜収容所分隊長で、人を殺したわけじゃないんですが、イギリス人の貴族みたいな人を重営倉に長く閉じ込めていたんで、それがたまたま、チャンギ刑務所で絞首刑になっちゃったんです。そのおじの遺書とか血染めのタオルとかを部下が戦後に持ってきてくれました。それで、当時、私の小学校時代から中学にかけて、日本のABC級戦犯の遺書が全部載っている『世紀の遺書』という本を読んでいました。それは巣鴨の遺族編纂会が作って、後に講談社から復刊されました。そのときはだいぶ、遺書が、ぼつんぼつんと、遺族の意向もあって落ちていたんです。だけれども、私はその遺

書を小さいときから読んでいたんです。おじの遺書も中に入っていた。そういう遺書を読んで、戦争と死刑・死に直面した人間にすごく心が動かされました。シンガポールのチャンギ刑務所というのはイギリスが裁いた所です。それで、これは最近知ったんですが、イギリスの国立公文書図書館に、そういう戦犯が裁かれた文書が残っているんです。おじの名は野口秀治で大尉だったんです。

ところが、公文書を見ますと、そこには Private Noguchi と書いてある。Private Noguchi。Private が分からなかった。アメリカ映画で『プライベート・ライアン』という作品があって、Private を引いてみたら、一等兵か二等兵なんです。つまり、おじは大尉なのに裁かれるときは一等兵に降格されていた。どこが降格させたかという、日本軍です。日本軍が、要するに負けるのが分かっていたから、当然、戦争裁判が始まると認識していた。だからスケープゴートです。何人か選んで降格して、このぐらいで勘弁してくださいという中に、おじも入っている。これは、普通の歴史家も知らない。

おじが関わった戦争で、日本軍が行ったことはとても残虐でした。私も韓国にいろいろ友人が多いので、戦時中の韓国のこと、さらに中国のことを調べていくうちに、戦争犯罪人として裁かれた日本人が、同時に加害者であり被害者でもあるわけです。上に立った権力者はうまく逃げちゃった。戦争責任はとっていない。その結果、今日、日本、韓国、中国は、戦争の和解に関しうまくいかず、特に韓国と感情的問題になってしまっています。日本人の若者もほとんど知らない。それで私としてはおじの刑死に発し、人間の和解とか、国と国が共に生きるにはどうしたらいいかという問題と、その根っこにある根源悪の問題をかかえ込むようになったんです。ドイツはかなり周りの国と対話しながら、ヒトラー時代を精算しようとしていて、地道な議論のいろんな積み重ねがある。『SHOAH』なんて映画もありました。

ところが日本ではそういうのがないので、私はまず、ドイツから学ぼうというのでアウシュヴィッツを取り上げた。私の著書の中にアウシュヴィッツが出てくるのは、別にドイツのアウシュヴィッツだけを研究するんじゃなくて、その研究や議論を深く参究し、こちらの東洋のほうの問題の参照にしようと思って、研究しているわけです。です

から、おじのそういう絞首刑が発端になって、それが現在、私のいろいろな研究、実践の中に生きている。ですから胎児時代に身に刻まれた、母親の世界破滅感を基に、現代の原子力発電所とか原子力とか、そういういろいろな危機を絡めて考えています。もう一方では、おじの戦犯としての死。これが幼年時代の基本的な2つのことです。

中島 それこそ、ハンナ・アーレントがナタリティ（出生）ということを書いて、まさに生まれるところにある種の新しさが本当に現れるんだとして希望を託していくんですが、宮本先生の出生ということを見ると、そこに戦争の影というのが相当深く差しているわけですね。終末の考えにはおじさまのこともあります。戦争の影を感じながら、高田で成長されていくんですね。

宮本 高田は母親の実家で、母方のいとことかの家族がみな戦争中に疎開していたわけです。ただ、おやじは新潟県をあちこち転動していました。

中島 転勤ですか。

宮本 ええ。ですから、小学校時代、高田は夏休みには行くんですが、基本的には、その転勤先で生活していました。5回くらいですかね。

中島 そんなにもでしたか。じゃあ、転校もされたわけですね。

宮本 泣きましたよ。せっかく新しい小学校にいて、かわいい初恋の人ができたと思ったら、1年で裂かれちゃう。また別の所に行って、恋をするとまた裂かれちゃう。一生裂かれる、原体験がそこにあったんじゃないかな。

中島 何か小さいときに、例えば読んだ本とかで印象に残っているようなものは、おありでしょうか。

宮本 小さいときといっても、私はあまり出来のいい子どもじゃなくて、母親が先生に呼ばれて、「この子はちょっと知恵遅れで、ぼうっとしたところがあるから」と言われるぐらい、ぼうっとして。読書は、4年生のときに移った官舎の前が図書館で毎日いっぱい読んでました。それはナポレオンとか、豊臣秀吉とか……

中島 勇ましい本ですね。

宮本 そう。勇ましいものですね。のちのちまで読書体験として残るのは、さっき申し上げた『世紀の遺書』です。

中島 それはいつ頃に読まれたんですか。

宮本 小学校の高学年で読んでいました。それで、読書らしい読書はやっぱり中学、高校時代に深まった感じです。

苦しんだ高校時代

中島 中学校はどちらにいらっしゃるんですか。

宮本 長岡中学です。長岡市という雪が深くて有名なところの中学校です。まだ木造の時代です。

中島 そこは3年間いらっしゃったんですか。

宮本 中高6年間です。あの頃は、中学にいた時代は、ちょうど戦後の松川事件とか白鳥事件とかがとりざたされていて、それらの事件は進駐軍がやったとか何とかというような議論もあったりしました。ヒトラーの『わが闘争』なんかを翻訳されたので四苦八苦して読みました。あるいは反ナチの大学生の運動を扱った『白バラは散らず』とか、フランクルの『夜と霧』なんかも読みました。

中島 もう、そのときにはナチズムに関する本をお読みだったのですね。

宮本 あれは高校時代で、そんな戦争の歴史や反戦本がそろそろ始まった時代です。だから、戦争ということ、その影を深く感じた時代です。

中島 中学校時代には、何か読書体験でこれというのはありましたか。

宮本 中学の頃は、読書は乱読みたいなもんです。高校になって本格的に始まったんですが、あの頃はドストエフスキーの米川正夫さん訳とか、そういう世界文学の翻訳がどんどん出てきた時代です。だから高校時代は『ジャン・クリストフ』とかドストエフスキーの作品を読んだりしました。『カラマーゾフの兄弟』とか『貧しき人びと』なんかは、随分好きですね。

中島 高校は、どちらだったんですか。

宮本 長岡高校です。

中島 じゃあ、長岡中学、長岡高校と進まれたんですね。

宮本 高校はあまり好きじゃなかった。

中島 好きじゃなかったんですか。

宮本 山本五十六が出たところですから。ちょっと……

中島 そういう気風が残っていたんですか。

宮本 何となく。だから、私は、高校時代に一人で非常に苦しんだ問題があります。あの頃の日本で進歩的文化人というと、マルキシズム信奉ですよね。大体ソ連とか中国、北朝鮮などの国に、日本の文化人がまだまだ懂れていた時代です。やはり民衆が、幸せにならなきゃならないという願いを基に、そういう非常にオプティミスティックな共産主義社会というのを、みんなが夢見ていたんです。私も高校時代に、一方で、マルクスは読み始めました。それから、もう一つはキリスト教です。内面的な人間の実存を深めるというので、キリスト教にすごく興味を持ったんです。

中島 それは高校の時ですか。

宮本 ええ。それで、矢内原忠雄というのは無教会ですから聖書をよく講義していました。そのまとめの『矢内原忠雄全集』の『聖書講義』をわざわざ取り寄せて、読んでいました。あの時代は知識人の一般的な常識としては、宗教かマルクス主義という、二者択一ですよ。これが何とかまとまらないかというのが、私の夢でした。その当時は高校生で、大学の先生や教会の神父さんとか牧師さんに聞いたって答えが返ってきようもないので、ものすごく苦しんだんです。黒田寛一なんかいて、彼は、そういう実存とマルキシズムを調和させようというような著書を書いていましたから、黒田寛一は多少読んだんですが。ともかくそのように苦しんでいたのが高校時代です。

中島 その高校時代は、もう1960年代が始まっていたわけですね。

宮本 そのくらいですかね。そうですね、始まった時代ですね。

中島 日本社会も随分変わり始めていたと思うんですが、中高で影響を受けた先生とかはいらっしゃったんですか。

宮本 中学に1人、文学者で、共産黨員になることは拒否したけれども、宇野重吉の劇団民藝を長岡まで引っ張ってきて、私たちにチェーホフの『桜の園』とかゴーリキーの『どん底』だとかの上演を見せてくれた先生がいました。彼が文学的な興味を深めてくれたり、その上民衆が平和になる歴史に世界の歴史はとにかく進んでいくんだというような信念を持っていた人で、そういう意味で、すごく影響を受けました。

中島 丸山眞男は、戦後すぐに、「日本が新たに生まれ変わるための原理として、マルクス主義とキリスト教、この2つがある」と述べていまし

た。しかし、「革命の可能性はこの2つなんだ。しかし結局、革命は起きなかった」と言って、嘆くことになります。宮本先生は、でも、そのマルクス主義とキリスト教を合わせるような形が模索できないかとお考えになっていたわけですね。教会とは、もう長くお付き合いがあったんですか。

宮本 いや、まだ洗礼も受けていないですし、ほぼ既成の教会には半分絶望的でした。

中島 でも、教会には通われたりはしていたのでしょうか。

宮本 一応通って、教理みたいなのは勉強しましたが、教会のあの頃の教理という、例えばフランスの高校生を対象にするような教理で、ちょっと物足りなくて、神父さんにドストエフスキーをどう思うかなんて質問しても、全然言葉が返ってこない。

中島 全然返ってこないんですか。新潟の教会というのは、どんな感じだったんですか。

宮本 みんな、中国で布教していたイタリアのボローニャの出身の神父さんたち。中国から追われて帰ってきた。イタリア人ですから、これとといったロシア文学やマルクス思想の素養はなかった。それで、教会通いはそんなにインパクトはなかったわけです。

大学時代の出会い

中島 その後、東大に入られるわけですね。やっぱり東大に入ると、だいぶ風景が変わったのでしょうか。

宮本 はい。

中島 東大での出会いとかはいかがでしょうか。人との出会い、本との出会い、いろいろあったと思いますが。

宮本 東大に入って、今までの問題が徐々に解決していったんです。一番良かったのは、東大駒場の近くにザビエル寮という、イエズス会が経営している寮があったんです。そこには、東大生から上智、早稲田、いろんな大学の学生が集まっていました。クリスチャンは寮生の5%ぐらいなんです。それで徹夜でキルケゴールとレギーネ・オルセンの恋愛を一晩、二晩、議論したりしました。もちろん、早稲田のいわゆる



宮本久雄氏（右）と中島隆博氏（左）

全共闘の連中もいましたし。だから、マルクスのいろんな議論をやったりして、思想的にもまれました。それとは別に良かったのは、ネラン神父という、新宿でバーを開いている神父が信濃町の真生会館にいて、彼はフランス人的素養で、『ろごす』という思想、神学の本を出していて、それを読んで随分目が開けたんです。それは、1~2年生の頃です。それから、もう一つは井上忠という先生との出会いです。なるほど。もう井上先生は、そのときはギリシア哲学を駒場で教えてらっしゃったんですね。

中島

宮本

そうですね、駒場で教えていらっしゃいました。それからもう一つは押田神父とあって、出隆の元でギリシア哲学をやって、学徒動員で引っ張られて、帰ってきて哲学をやって、ドミニコ会という、トマス・アクィナスとかマイスター・エックハルトを出した、そういう修道会があるんですが、そこに彼が入った。しかしヨーロッパのキリスト教に不満を感じて、自分の実存に合わないというんで、長野の田舎に共同体をつくったんです。その共同体は、昼間は農業をやっている。私も春夏休みによく農業をやりました。牧場に行ったり、あちこちの田に行って、稲を植えたり収穫したりする。それで、農業をやりながら瞑想する。座禅も組みながら、クリスチャン禅というのをやっ

ていく。

中島 クリスマン禅ですか。

宮本 そう、これは後にヨーロッパとかアメリカでよく広まるんです。それをやって、夕方になると聖書をみんなで読んだりする。そういう共同体で、理想的には、いろいろな人を受け容れるんです。困っている人とか、求道者とかを受け容れる。押田神父自体は肺結核を患っていて、かつて海で溺れて海水を飲んで死にかけて肺がめっちゃめっちゃになったというような人でした。それで、富士見という、堀辰雄の『風立ちぬ』とかの舞台になった木造の結核療養所で養生していたのですね。その近くの高森で彼が、集まった患者同志と共同体の根っこをつくった。その共同体でいろんな人と農業をやりながら祈りの生活をやって、そして聖書を深く読んでいく。後に彼は、仏教の座禅会にも出ていたんですけども、インドに行った。インドに行くと、ヨーロッパ人でヒンズー教に出合って、ヨーロッパのキリスト教だけじゃ駄目だという考えで、ヒンズー教の生活様式とか祈りの様式を取り入れた、コンテンプレーション、観想生活というのを送っている、レイモン・パニカーだとかマリー・ロジャースだとかという、そういう人たちがいた。そういう人たちと押田神父は出会ったりして、いわゆる東洋的霊性が深まる。後に高森に、欧米だけじゃなくて、アジア、インドから、そういう何か道を求めるいろんな人が来ました。私自身そういう人たちとの出会いが、とても、胸に残ったんです。

中島 伺っていると、大学の外での出会いが非常に豊かな感じがいたしますね。

宮本 そうですね。大学は大体、あの時の駒場の1~2年生というのは授業に出ないことを誇りにしていたもんです。

中島 やっぱり出ているじゃないですか。

宮本 出ませんでした。一夜漬けで何とか試験をこなしていったという。

中島 フランス語を選択されたのでしたでしょうか。

宮本 いや、私は高校時代にドイツ語も好きで、不思議なことにドイツに憧れていた。

中島 そうですか。じゃあ、ドイツ語を……

宮本 だから駒場では、フランス文学にあまり魅力がなかった。ドイツは何

で引かれたかという、哲学、思想、音楽と、私にとっては非常に豊かな文化の宝蔵だったので、高校時代から懂れて、大学に入ってから第二外国語はドイツ語です。だから夏休みの間に、ギョイテの……

中島 ギョイテ（笑）。

宮本 彼の『Die Leiden des jungen Werthers』という『若きウエルテルの悩み』を半分読むほど奮起しましたけれども。だから、あの頃はドイツ語を習っている仲間に、夏休み中なんか、「俺はカントの『Kritik』を読んだよ」という、そういうのがいたんです。

中島 すごいですね。

宮本 私なんか新潟の田舎からぼうっと出てきて特に驚いたのは、あの頃は日本で、三井三池炭鉱争議とかがあった時代ですが、高校時代にそういう炭鉱の労働者の争議にコミットした連中がクラスに来ていて、アジるわけです。こちらは、ぼうっとするしかなかった。そういう時代でした。だから、その友人たちのインパクトも、ものすごい。すごいのがいるなど。別の話ですがしゃくに障るのが、関西から来た連中でした。私はやっぱり江戸弁に対してコンプレックスがあるわけです。でも彼らはものすごくペラペラ関西弁をしゃべる。関西から来た連中は変えようもしないんです。関西というのは、どういう文化かなと思っていたら、後で京都に1年半過ごすときがあって、なるほど江戸の連中も文化的歴史的にばかにされるわけだと納得しましたけれども。

中島 そうすると、1～2年は駒場で過ごされて、その後は哲学科に進学されたんですね。

宮本 はい。

中島 なぜ哲学科を選ばれたのでしょうか。

宮本 駒場はあのときは科学哲学があったりしたんですが、いわゆる哲学はなかったのです。

中島 当時は、井上忠先生以外はどのような方がいらっしたんですか。

宮本 あの頃は、まだ廣松渉さんは来ていない時代で、もちろん科学哲学の……

中島 大森荘蔵さん。

宮本 そう、大森荘蔵さんとかがいらっしました。また、西洋古典学は

あったんです。それから科学哲学はあったけれども、哲学を勉強する場がなかった。だから、本郷に行けばギリシアから現代までの哲学講義あった時代です。本郷に来てよかったと思うのは、ギリシア哲学を教えていたのが、独眼竜で、ギリシャ哲学の斎藤忍随先生がいて、ギリシア語で、アリストテレス、プラトンとか、苦勞して読んででもまれたんです。

中島 山本信先生もいらっしやいましたね。

宮本 山本先生で、これもラテン語でデカルトの『省察』、フランス語でライプニッツを読みました。あとは岩崎武雄さんで、有名なカントの『三批判』をこれもドイツ語で読む。それから渡邊二郎さんが、ニーチェと。

中島 渡邊先生はもういらっしやったんですか。

宮本 いらっしやいました。フッサールは『イデー』をちょっと読んで、ニーチェは『権力への意志』とか。まだウィトゲンシュタインが日本に本格的に導入される以前の時代です。中世は誰もいなかったので、加藤信朗先生が非常勤で来てトマスとかを読みました。他方で加藤先生は上智大学でアウグスティヌスのゼミをやっていたから、アウグスティヌスの『告白』とか『三位一体論』を読ませていただいた。以上の講義を通じ非常に良かったのは、古代から少なくとも実存主義、サルトルぐらいまでのゼミ全部を原語でやったんです。これがとても良く記憶に刻まれて、後でどんなに怠けても青春の記憶は抜けないですから。だから、東大に招かれて来たとき、哲学史を教えろなんていわれて慌てたんですが、「なんだ、昔やったんだ」とか言って。

中島 でも、語学をそれだけやるのは大変だったんじゃないでしょうか。

宮本 実に大変でした。

中島 ただ語学をやるだけじゃなくて、テキストを読まなければいけないわけですから。

宮本 大変で、朝から晩まで語学をやって、原典を読んで、夜は友人と一緒に、あの頃は『昭和残侠伝』なんていう高倉健の映画を見に行っていました。夜は『昭和残侠伝』、朝になると真面目に原典読解。そんな時代です。

中島 そうすると、本郷の3~4年生のときは相当勉強なさいましたね。

宮本 ええ。それで良かったのは、卒論も修論もトマスで書いたんです。

中島 何でトマスにしようと思われたのでしょうか。

宮本 あの頃は、本郷にギリシア哲学研究で来ていたわれわれの同輩が、ギリシア研究で2~3人いた先輩に教えてもらって、アリストテレスの『メタフィジカ』を読み始めた。ただ『メタフィジカ』というのは、ご承知のように学生がノートを取ったものの集大成で、ばらばらで、まとまっていない。まとまっているのはラムダ巻ぐらいですか。だから、読んでいっても歯が立たないし、何を考えているのか分かんないし、読めば読むほど私の脳がごちゃごちゃになって。

そうしたら加藤さんが、「君は神のことも興味がありそうだ。だからトマスをやったらどうか。形而上学もちゃんとあるし、倫理も人間論も、神についての神学もあるから」というんで、それでトマスをやったんです。

中島 じゃあ加藤信朗先生のご示唆があったわけですね。トマスで卒論修論で実際にやってみて、いかがでしたでしょうか。

宮本 やってみて良かったのは『De Veritate』という、「定期討論集」(Quaestiones Disputatae)『真理論』ですね。とても分厚いのを全部読んで、論文にしたんですが、やっぱりトマスを読んで非常にクリアに超越に向かう論理構成に生まれて初めて合いました。ハイデガーもドイツ語で読んだんだけど、難しいでしょう？

中島 難しいです。

宮本 ニーチェの『権力への意志』なんかも、アフォリズムでやっていて、これもなかなか晦渋。だから、ヨーロッパ哲学の基本的な論理構成とそれが目指す神学的飛翔とを体験をしたのがトマスです。良かったです。

中島 卒論は何をお書きになったんですか。

宮本 卒論は、何かトマスの人間論だったかな。

中島 修論はいかがですか。

宮本 修論が、『De Veritate』。

中島 修論が『真理論』だったんですね。そうすると、トマスを通じてキリスト教への関心もどんどん深まっていったように見受けられます。

宮本 それにちょうどいいのが『神学大全』。というのはそこにはキリスト

に関わる問題が何でも出ていますから。

中島 指導教員というのは、どなただったんですか。

宮本 結局、加藤さんが引き受けてくださいました。

中島 実際には、加藤先生だったということですね。

宮本 ええ。もちろん論文の主査はギリシア哲学の斎藤先生でしたけれども。あの頃は、非常に面白い思想的冒険の時代でした。

カナダへの留学と五島列島での体験

中島 それで、カナダに留学されるんですか。

宮本 大学紛争が始まったでしょう。医学部から始まって、いろんな学部がコミットして、とうとう安田講堂は機動隊が入った。ちゃっかりしているのが法学部で、ぱっとやって、ぱっと手を引いた。一番ばかなのが文学部で、最後まで。だけれども、非常に惨めな終わり方をしました。私は勉強したかったんですが、半年以上、授業がゼロになっているわけです。どこの教室も封鎖されて、大学が開始されても、昔の覇気がある、学問を深めよう、哲学を深めようという気持ちがなくなっちゃった。その後みんな若者は結構日本を捨てて、海外に一文無しで、何でも見てやろうで出た人たちが多かったです。私は押田さんの影響で、ドミニコ会の門をたたこうと思ったんです。

それでドミニコ会で勉強するというので、まず神学からやらなきゃならない。それでカナダのオタワに哲学神学大学があって、そこで神学の1年2年3年、それから修士の1年2年をやりました。本場のカナダでも、トマスを教えてくれる先生が年を取っていなくなっちゃったんで、聖書をやろうかなと思いました。やっぱりあの時代は、みんな若者が苦しんでいたし、大学紛争とか何かでトラウマが多かったですよね。だから、苦しみをテーマにして取り上げたのがJeremiah。エレミヤ預言者が書いた『告白』という苦悩と新しい生き方を求めた告白文学があるんです。その『告白』をテキスト批判をやって分析してエレミヤの苦しみ、声を聞きたいと思って一生懸命潜心したんです。

フランス語で書くのが大変でしたけれども、涙ながらに何とかでっ

ち上げました。そしてヘブライ語を本格的に始めたのは、その頃です。今は、ほとんど忘れていますがそれでも。

それで、カナダに5年間いて、あまり長過ぎるから日本に1年帰ってこいと言われて、日本に帰ってきて、東京なんかには行ってしょうがないから、どうせなら信仰の原点であるキリシタンに会いたいもんだと思って五島列島に行った。小値賀島という島に行くと、スペインのエルミット（隠者）が何人か来て隠れキリシタンの祈りを自らの祈りとすべく住んでいたんです。そこでふらふらして隠れキリシタンとの出会いを願っていたら、ある食堂でどてらを着たおじさんに会った。彼に隠れのことを聞くと「今度、結婚式があるから来い」と言われて、結婚式の前の日にそのおじさんの家に行ったら、彼が隠れキリシタンの頭領だった。それで、いろんなものを見せてもらった。ポルトガル、スペインの宣教師が持ってきた、いろんな歴史的なかたみ、ロザリオとか、自分のむち打ちをやるための道具とか、いろいろ。それから、キリシタンは昔、古いキリシタンが新しいキリシタンの頭領交代するとき口伝でいろんな祈りとか伝承を、1週間ぐらいこもって伝えるんです。書くと、ばれちゃいますから。

ところが、明治以後キリシタン禁制が解かれて、最近は書いたもので伝承を伝えている。その書いたものを見せてもらったら、もちろんパーテルノステルとかアベマリアというラテン語の祈りが平仮名で書いてあるんです。彼らは何を書いてあるかが分かんないから、パーテルノステルというのは主の祈り「天にまします」だと教える。中には、「ブドウのつるから採りたる汁」とか、ミサ用のぶどう酒について書いてあるんです。一番分からなかったのは、「なのかのしちや」という表現。「ななにちのななよ」と書いてあるんです。そういう表現があって、七夕さんかなと思った。ところが、これは読んでいたら分かんないと考えた。口伝を書き写したのだから……

中島 音なんですね。

宮本 音で、「なのかのしちや、えいかりしちや、えうかりしや、えうかりしちや」、つまりエウカリストニア・ミサのことをいっている。その日は、そういうことで終えて、翌日に結婚式へ行ったら、案の定、結婚式という偽装の下に新しい司祭を叙階する会がありました。両側に

5人ぐらいずつかな、若衆が着座して、新しい司祭と古い司教さまが上座に並んでいる。結婚式の偽装だから、いろいろ食べ物があるんです。見ていると、昔の結婚式風で、落雁のタイだとか、菓子だとか、ああいうのが出でるんです。それで、みんな、日本酒をものすごいスピードで、一気に飲む。これはワインの代わりに飲んでいるというのは分かったんだけど、むしろパンですよ。パンは、何がパンに当たるのかなと見ていたら、するめがあると。

中島 するめ、ですか。

宮本 パンがわりにするめを切って出している。そして、見ていたら隣におばあさんがいて、「ちょっとトイレに行ってくる」と言って、10分くらいおきに、ずっと家の入り口にあるトイレに行く。おばあさんをはらからかって、「年を取ったからトイレが近くなったね」と言ったら、「いや、そうじゃない」と。「トイレは入り口にあって、幕府の役人か何かが来るかもしれないから、そこで見張るんだ」と。だから、トイレに行くのも儀式の一部なんです。その写真は、当時に撮ってあって、これは貴重な歴史的資料ですね。(参考：『隠れキリシタン——生月・五島から受難に息吹く祈りの円い』教友社)

その元触^{もとふれ}部落のグループは、自分のところの儀式の写真とか記録は一切残さない独特なところなので、「先生が撮った、保存してくれた資料というのは非常に貴重です」と言われました。それで1年間、日本に帰ってきがいがあったと。そのあと、ヨハネ・パウロ2世が日本に来たときに、キリシタンの代表が会って彼が祝福した代表とはまさにその元触部落のおじさん。だから、いろいろ大学以外のところじゃあ……

中島 宮本先生は、大学以外ですね(笑)。

宮本 学校以外のところが面白いんです。

イスラエルでのカルチャーショック

中島 それじゃあ、その五島列島の出来事の後に、また海外にいらっしゃるんですね。

宮本 それで今度は、聖書を勉強したいと思ってイスラエルに行きカル

チャーショックを受けました。イスラエルの École Biblique et Archéologique かな。ドミニコ会の聖書学考古学研究所というのが、フランスの国立でありました。そこに死海写本の発掘に関わったことで有名なド・ヴォーというドミニカンがいました。アラブ人と親交のあるフランス系の聖書学者や考古学者が教えるところに1年間いました。そして、とても良かったのは、そのときはフランス語で、やはり苦しみをテーマにして論文を書いたということと、それから旅行をよくしました。月に一遍、イスラエル中の、例えば死海から、マサダ、サマリア、ガリラヤ湖畔だとか、いろんな所を旅するんです。加えて年に一遍の旅行で、シナイ半島へのモーゼの旅をしたんです。どういう経路で行ったかという、イスラエルから赤十字のパスポートをもらって、ヨルダンに抜けた。非常に検問が厳しいんだけども出るときは大したことはない。ヨルダンでは、スリーピングバッグで寝て、「石の下には毒のサソリがいるから気を付けろ」と言われて、「宮本武蔵だぞ」とか言って、対サソリ用に木剣の太いのを差して出たもんです。

確かに、ギリシア人の学生夫婦のスリーピングバッグにサソリが入っていたとか、危ないことがありました。それからアラブ人の運転するおんぼろバスで行くグランドキャニオンみたいな、ものすごく深い渓谷を通して砂漠に降りて夜営する。砂漠の夜は寒いです。スリーピングバッグにグンゼの毛布を敷いて、入る。毛布を敷いていても歯ががくがくするほど、夜になると寒い。逆に今度は、昼間は暑くて、鉄板の上で卵をジューッと目玉焼きにできる。印象的だったのはペトラという町があります。ペトラというと、有名なアメリカの映画『インディ・ジョーンズ』にも使われた所で、そこに入ると、山を全部くりぬいて、墓を作っている町なんです。初めて、体験として、何でこんなに墓がいっぱいなのかと驚いた。住民は若いときから自分の墓を作り始める。つまり、この世界で生きるよりも、あの世に行った時間のほうが長いから、生きている最中から墓を用意しておく。つまり現代人と逆の発想ですよ。古代エジプトもそうだと思うんですが、こういう物の考え方もあるんだなと思いました。

そういう印象を刻まれて、ペトラからいよいよエジプトに入って、

シナイ山麓のカタリナ寺院のゲストハウスに泊めてもらって、そこから午前3時頃に起きて行くと、ちょうど朝日が昇る頃にシナイ山のでっぺんに着くんです。シナイ山というのは、「出エジプト記」でいうとモーゼが神と契約して十戒をもらった山だとかということです。朝日が昇ると山が真っ赤に燃える。そこでこれは神のねたみ、情熱がそこに染み込んだ山だといわれているんです。その旅の最初から最後まで私が非常に苦労したのはグループの食事作りで、何を隠そう私が料理長、コック長だった。

中島 料理長でしたか！

宮本 それで、実際ヨルダンに行くとき、みんなにスープを飲ませますよね。スープを飲ますといったって、子どもが水浴びして、奥さんが洗濯して、向こうでロバが水を飲んでるような黒みがかった水を飲んできて、みんなにスープを飲ませるときは脱脂粉乳をいっぱい入れてなるたけ白くして飲ませたり。きれいな水のオアシスもありましたけれども。一番カルチャーショックというか面白かったのは、フランス人が全部で10人ぐらいいました。そのフランス人が、ある日、全員で私が休んでいるバスの入り口まで来て、「パン、パン、パン」と手をさしのべて言った。

中島 欲しくてですね。

宮本 日本人の私は主食が米だから、米ばかり出していたらパンが主食のフランス人の反逆に遭ったわけです。そういう苦労をしました。カデシュバルネアに行くため、イスラエルの原爆実験場の所なんかは、まだ通れたんです。でも、みんなあたりは地雷原です。地雷原の中を、ずっと入って行って、モーゼたちが滞在したカデシュバルネアに着いたら食事の用意をしなくちゃならない。燃料がないときは枯れ木を集める。長く1時間も2時間も歩いて集めるんです。その先のワジ・ラムなんて行って、アラビアのロレンスが活躍した谷の、半分砂漠で半分草原みたいな所を何日間も歩く。そこでもくたくたでも、また枯木を集めて火を起こして飯を作るとか、そういうこともやった。だから、その旅は異文化体験みたいにこの身に非常にインプリントされています。

中島 その途中で、何か特殊な経験とかはなさらなかったですか。

宮本 全部、特殊でした。

中島 全部ですか（笑）。

宮本 初めての体験ですから。つまり、私は農耕民族でしょう。だから特殊な経験の一例という、面白かったのは私たち 30 人くらいがお金を出して、ベドウィンの家族に招かれて、ヤギをごちそうしてもらう。ベドウィンの人はお風呂場みたいな所でヤギの血を抜いて、あとはたらいみたいな上に、米を富士山みたいにのっけて、バナナを敷いて、肉をのせる。私は疲れて横になってウトウト。目を開けたら目の前にヤギの頭が、ドスンとある。向こうのたらいには内臓とか足だとか手が、ばらばらになってのっかっていました。それでも、フランス人の友人なんてヤギの頭を取って、目玉をほじくって、「うまいな」とか言って食べている。尾頭付き。それは全くカルチャーショックです。例えばですが。

中島 なるほど。本当に濃密な経験をされましたね。

宮本 ええ。イスラエルは特別でした。

中島 それもフランスの国立の聖書学研究所だったんですね。

宮本 ええ。ドミニコ会とフランス政府の、共同のものです。

ドミニコ会での生活

中島 その後はパリにいらっしゃったんですか。

宮本 ええ。その後にパリに行ってからやはり聖書の研究を続けていたんですけれども、教会教父、特にギリシャ教父の勉強を始めました。パリで良かったのは、ドミニコ会のサン＝ジャック共同体に住んでいて、単なる留学と違って、共同体で向こうの人たちと衣食住を一緒にして生活していると、みんなは神父だから、いろんな家族も知っていて、私も一緒にそこに招かれ見聞を広めることができる。だからフランスという国が内側からよく分かります。サン＝ジャックは有名な図書館を持っていて、フランスの哲学者は、サロンで相互交流をしますから、ミシェル・フーコーだとか、いろんな哲学者・文化人がそこに集まって話をします。そういう所もドミニコ会の中にあるんです。もっと良かったのは、あの頃に、20 世紀のネオトミズムを起こした神学

者のシュヌーとか、イヴ・コンガールという神学者など、みんな第2バチカン公会議をプッシュしたような新しいビジョンを持っていた人たちと共同生活をできたことです。シュヌーからは、「君は東洋人で、フランスまで来てヨーロッパの哲学とかいろんな勉強をするのもいいけれども、やはり東洋の勉強をして、東洋の社会でフランスの哲学、思想、文化を役立ててほしい」ということを言われました。やっぱり見識がちゃんとあるわけです。

中島 パリでは、他にはどういう先生方と交流があったんですか。

宮本 いろいろな先生たちがいました。私が行ったのは Institut Catholique の宗教哲学科で、パリ第4大学と交流を持っているところです。そこで出会ったのがクロード・ジフレという神学者です。クロード・ジフレはカトリックの神学だけでなく仏教とかユダヤ教とかヒンズー教とかもやって宗教間対話を目指している人で、後で駒場に私は招聘したことがあるんです。一月ぐらいいて講義をしましたね。

東大駒場時代

中島 それで、東大に戻られたんですね。

宮本 ええ。井上忠先生が帰ってこいと。

中島 突然ですか。

宮本 突如として。

中島 手紙が来たんですか。

宮本 青天のへきれきで。

中島 手紙か何かですか。

宮本 いや、山本巍君が密使で来るというか、彼が声を掛けてくれたんです。それで駒場に赴任して哲学を教えることになったのです。井上先生のグループで哲学をやったのは、とても良かったです。あの頃は駒場が充実していた時代じゃないですか。

中島 そうですね。井上先生がいらっしやって。

宮本 廣松さんもいたんじゃないかな。

中島 廣松先生もそうですね。

宮本 大森さんは、まだいらっしやったぐらいですね。

- 中島 ぎりぎりいらっしゃって、黒田亘先生とかも。
- 宮本 そうですね。それから村上陽一郎さんがいたときだったかな。いろんな面白い先生がいて、またちょっと本郷とは違った雰囲気でした。
- 中島 駒場の学風が合ったように思います。
- 宮本 そうですね。
- 中島 なくなっちゃった2号館ですね。
- 宮本 そうです、木造の。私が行ったときは、末木さんが使っていた部屋の後釜になりました。
- 中島 末木剛博先生、お父さんのほうですね。
- 宮本 ええ。論理学の方です。あの頃は楽しい時代です。
- 中島 やっぱり東大に戻られてから、さっきおっしゃった教父哲学の研究をされていたんですか。
- 宮本 それも続けていました。東大に来て、聖書学の大貫隆先生、そして黒住真君が日本思想史でいて、後で公共哲学の山脇直司君が来たり、亡くなった岡部雄三さんが……
- 中島 亡くなられましたね。
- 宮本 岡部さんがドイツ神秘主義をやっていたりしていました。駒場で、あの頃は初めて、明治始まって以来キリスト教の講義とか本を、どっど出していた時代です。あの頃は金泰昌なんかが京都フォーラムをやっていて、当時東大総長だった佐々木毅さんらと「公共哲学」の成果を、東京大学出版会を利用して出していました。金泰昌もキリスト教に興味を持っていたから、京都フォーラムでも一神教についてフォーラムを開いて『一神教とは何か』を東京大学出版会から出した覚えがあります。それらは仲間と私が手を組んでやったんです。というのは、日本の知識人の皆さんは、キリスト教の知識とかコンタクトが、私から見るとあまりにもなさ過ぎる。だからヨーロッパの理解も、見てみると、いまひとつ足りないんです。それは強く感じました。今はそうしたキリスト教研究の気運はもうすっかり消えてなくなりましたけれども。それは、とてもいい時代でした。あと駒場でやったことでは、小林康夫さんが中心になって展開されたUTCPですね。UTCPで私は大したことはやらなかったけれども、記憶に残るのは岡部さんたちとプラハだとかウィーンのほうに行ってシンポジウムを開いた



中島隆博氏

り、それから熊本で石牟礼道子さんと対話したりとか、いろんなことをやりましたね。

中島 駒場に戻られてから、しばらくは宮本先生ご自身の本とか論文がどんどん出るという感じではなくて、じっくりと力をためていらっしゃる感じでした。

宮本 そうですね。

中島 そういう時期でしたよね。

宮本 あまりにもいろんなことをやってきたんです。哲学をやって、新・旧聖書学をやって、教父研究をやって、日本の宗教、フランス哲学もちょっとやったり、いろいろやってきて、どれも8割もいかない、7割6割ぐらいの熟成度。今、私はエヒイエロギアなんて発想でやっていますけれども、専門は何ですかと聞かれるのは、あまり好きじゃない。というのも、今、私がやろうとするのは、こういうふうにいるいろんなことをやってきたものを、かなりのレベル、普通の専門にやっている人たちから見ても、そんなに見劣りしないぐらいのレベルに上げていって、いわば総力戦でエヒイエ（脱在）を核心として、ヘブライ的な脱在論をやろうというのが私の考えなんです。



宮本久雄氏

日本で専門家になったところで欧米人の思想や哲学などの研究には、かないこないんです。だから、私は日本の思想もヘブライ思想も入れて、総力戦で、根源悪の問題をどう超え相生の地平を抜いていくか。それには実体主義とか存在神論を超克していくために、ヘブライ的な思想を利用して、エヒエに全部を投入しようというのが今の課題なんです。そこまで達するための時熟が必要というか。

中島 ハイデガー的な概念ですね。

宮本 そんな感じですよ。

中島 私自身は多分、宮本先生が駒場にいらっしゃった最初の頃の学生だったと思うんですが、授業で印象的だったのは、先ほどおっしゃったイスラエルの経験です。結構これをお話しになっていて、サルトルの議論と重ねながらお話しになったり、谷間を歩いていくときのお話とか、あと親鸞についても随分お話しされていましたね。

宮本 そうですね。

中島 やっぱり親鸞を中心に、いろいろ日本のものもお読みになっていたんだなど、あらためて思いました。

宮本 母方の実家が浄土真宗ですから、小さい頃から無量光仏が灯明に輝く

前で、おばあさんたちの一番後ろで、「なんまいだ、なんまいだ」と。だから、今、私の心の中では「なんまいだ」のほうが「天にましますわれらの父よ」よりも近い。「なんまいだ」と、自然に出てくるんです。「なんまいだ」と。というのも、キリスト教の邦訳は良くないですから心にぴったりこない。

中島 あれは南無阿弥陀ですからね。「ああ、阿弥陀」という。

宮本 「なんまいだ」というのは自ら。

中島 でも、私は先生の授業をたくさん取らせていただいて、アウグスティヌスやトマスを読んでいただいたりしました。

宮本 あれは、教養学部1~2年の特別講義でしたっけ。

中島 確かそうでした。ほとんど人数がいなくて。

宮本 それで私が取り上げたのは、ギリシア語で擬ディオニュシオスの『神秘神学』とか、ラテン語のトマスの著作とか。大体、理Ⅰの人も多かったし、法学部、文Ⅰの学生も多くて、肝心の文学部行きの文Ⅲが来ない。それで、みんな優秀なんです。例えば、数学科に行った田辺君だったかな、彼はモスクワに留学して、モスクワから連絡が来たときは、ニュッサのグレゴリウスのギリシア教父を、今はこちらで勉強して論文をロシア語で書いているとかと書いていましたけれども。今、彼はコンスタンティノーブルの、フランス国立の、フランス人向けのハイスクールで教えているみたいです。そんな学生も出ているわけで、とても面白かったです。だから、中島さんが……

中島 僕が教わったときは、トマスの『De ente et essentia』を読んでいただいて。そのときに……

宮本 それからしばらくたって、中国哲学のほうに。

中島 私は、そうですね。

宮本 行かれていますよね。

中島 そのときに、「『Summa theologiae』を買いなさい」と言われまして、「四谷の本屋さんに予約をしておいたから」とおっしゃって、それで買って読みました。読んで、やっぱり非常に面白かったです。夏休みをかけて、一部だけですけれども読むという経験をさせていただいて。あと宮本先生は、あれは夜だったと思うんですが、ギリシア語で聖書を読む会というのを、ちょっとやってくださった時期が……

宮本 そうでしたっけ。

中島 あったんですね。

宮本 忘れちゃった。

中島 2号館の、冬だったと思うんです、ストーブをたきながら。ギリシア語で聖書を読むという会でした。本当に真っ暗な夜でしたね。そういうこともやっていただいて、駒場の、僕の中では非常に大事な時代だったなという気がいたします。

宮本 ラテン語はともかくとして、若い時代にギリシア語に触れておくというのは、いいと思うんです。

中島 山本先生の名前で、荻野弘之さんがギリシャ語を教えるという授業があって、なかなか大変な日々でした。

宮本 そうでしたね。

中島 おかげさまで、宮本先生の、ギリシア語で聖書を読む会にも出ることができた。

宮本 いい教育者ですから（笑）。

中島 ええ。そのときに例えば、東方教会の翻訳とかもなさいましたよね。

宮本 あれはニュッサのグレゴリウスの『雅歌講話』。旧約聖書の中にカンティクム・カンティコールム、ソング・オブ・ソングス「雅歌」という、神の名が出てこない恋愛歌、あるいは祝婚歌が入っているんです。それに対するグレゴリウスのコメンタリーが延々と続いている。どういうコメンタリーかというと、若者がキリストまたは神で、若者の相手はキリスト教信者とか教会共同体という比喩的な解釈をするわけです。これがヨーロッパの恋愛論にもものすごく影響を与えている。中世ではミネ（宗教的情熱）によるキリストとの一致を説く女性の神秘家は、みんなこの影響を受けている。それからスペインに行くと、『霊の讃歌』の神秘家十字架のヨハネ。近代のフランスでも、こういう影響を全部受けて、アンドレ・ジッド、ポール・ヴァレリイ、ヴィクトル・ユーゴー、ジュリア・クリステヴァとかも全部、こういうものがバックにあって、フランス文学の下地なんかできています。これらで一番源泉になる、ニュッサのグレゴリウスの『雅歌講話』を翻訳したんです。

この翻訳を5人くらいでやって、面白いんです。最初に翻訳したの

は、高野山までみんなで行って、墓地に一番近いお寺に泊まり込んで、朝は起きるなんて言われたけれども適当にあしらって、おいしい精進料理を食べて、1回目はやったんです。2回目は付知峡といって、名古屋から木曾の沿線できかのぼると、深山幽谷があるんです。それで、民宿に行くと、ヤマメとか何かを養殖して食べさせてくれるんですが、そこに集まったわけでしょう。そうすると、谷隆一郎君が九大で、九州から来る。われわれは東京から来る。大森正樹さんは名古屋から来る。みんなが集まってきた。それで部屋に入って、ごそごそ密談しているわけ。翻訳して。宿の人が、あのグループは怪しいと。あの頃、オウム真理教はまだだったですが、学生の凶悪な集団じゃないかなんて恐れられたり。

もっと面白かったのは、大原美術館がある倉敷です。大原美術館の美観地区の宿を借りて、そこで翻訳したんです。翻訳して、それで、2泊か3泊するから、当然昼間は宿で腰を落ち着けて翻訳できると思っていたら、「お客さん、出てください」と。「昼間はここで宴会をやりますので、出てください」「だって、われわれは借り切っているんだから。どうしたんだ」と言い合うと、「美観地区に来て、昼間出ないでいる人は歴史上初めて」と言われたりして、そういうことをやって翻訳したんです。

中島 楽しみと、いろいろ混ざっているわけですね。

宮本 そういう意味で翻訳は楽しかったです。それからニュッサのグレゴリウスは、『モーゼの生涯』などいろんな翻訳が出てきて、リーゼンフーバーさんという、上智大学哲学の先生が、『中世原典集成』という……

中島 叢書ですね。

宮本 叢書を出してそこに載りました。あれは、とにかく誰もできない事業ですね。お金もかかったし。ああいうものもあって、ギリシア教父もかなり翻訳が進んだんです。そして、もっと良かったのは、私が上智大学に移って、神学部でギリシア教父を教えていたときに、女学生が『雅歌講話』に引かれて、ゼミに出てくる。みんながギリシア語を勉強するんです。東大からも、特別に先生の授業に出たらいいかといって、来たりしまして。あの頃に勉強した女学生が今、みんなどこかの

大学の准教授くらいになっているんです。男性も何人かいますけれども。だから、あの頃の学生で、今は准教授になっている女性で30歳から40歳すぎまでが、日本のギリシア教父の研究の時代を背負っている。

中島 厚みもありますね。

宮本 だから、われわれの世代が日本にギリシア教父研究を植え付けた最初の世代。その前は京都大学の山田晶さんとか、九州大学の稲垣良典先生などがトマス・アクィナスとアウグスティヌスを日本に植え付けていたんです。その次のわれわれの世代が、ギリシア語でギリシア哲学を勉強し、キリスト教の素養もあって、初めてギリシア教父を翻訳した。タイミングがちょうど合っていたんです。ですから、そういう意味では後輩にバトンタッチできてとてもよかったです。

ハーヤーからエヒエロギアへ

中島 後半は、宮本先生の学問の内容に少し踏み込んで伺えたらと思うんですが、ある時期から本を毎年のように出されるようになりました。さっきおっしゃった総力戦が実を結んで、次々に本を出されるようになったと思います。今回、和辻哲郎文化賞を受賞されたのは、『パウロの神秘論』ということで、私も受賞の作品紹介というのをやらせていただきました。エヒエロギア、この話を脱在、これを中心に組み立てをされているんですが、その前は例えば、ハーヤー論というものも結構、深掘りされていた時期もございましたね。ハーヤーに関してはどういうふうに出会われたんですか。

宮本 この成り行きは複雑なんですけど、先ほど申しました世界の根本的な崩壊感、危機的な、キリスト教的に言えば終末論になるでしょうけど、まだそこまでいかににしても、世界の崩壊感にとまとう何ともいえない不安とか意識、それがこの私のはらわたにあります。それをもたらした間接的な背景は、アメリカ軍の空襲であり世界戦争であるわけです。それと、おじの処刑のように、人間同士が裁いていくことの背景にも戦争がある。そこで人間性というものが野獣化して行って、いろいろな目を背けたくような出来事が現代にも今、起こっているわけで

す。私はそうした出来事を根源悪のあらわれ・現象と考えています。恐ろしく崩壊していくそういう世界の中で、根源悪が生み出す思想を「存在神論」と私は名付けているんですが、一種の全体主義です。この世界を全部征服してやろうという、所有して自分たちのため、あるいは自分のために利用しようという人間の我欲。仏教的に言えば無明であり、虚無に向けて落ちていく表現できない人間の在り方が生み出した思想。全体主義的な思想をたぐっていくと、やはり所有ですよね。我有というのかな。そこにいきつく。

だから、さっき言った無明も全部、全てを空（くう）として悟れば晴れる。この世界のものには金でも、いろんな名誉でも、家族でも、結局永遠に所有できない。そういうことを悟れば、それに執着することはない。逆にものが実体化されて、実体化が持続していつまで所有できるブツですよ。物になっちゃう。それを利用して自分が欲望を満たし、好きな自己中心的世界をつくっていくんですが、その思想化を存在神論とヨーロッパでは言われているわけです。その実体化に対して、例えば仏教というのは、実体化というのは無明なんだと。先ほど申しました様に、この世界（色）というのは関係、ご縁でできているわけです。いろんな縁が重なってできていて、その縁が集まったところに色（しき）が、人間なり、自然なり、いろんなものが生まれてくる。色というのは、あくまで関係のご縁でできた世界で、その中身は無なんです。空なわけです。それが空即是色、色即是空。それを悟れば、物事を実体化して執着することはないということになるわけです。以上の意味で東洋の見地からすると、仏教的存在は存在神論超克の有力な手がかりといえます。

他方で哲学的に、そういう存在神論というものを越えるためには、どうしたらいいかという議論があります。例えばレヴィナスみたいに、他者の地平を見出すために善だとか倫理のほうに話をもっていくことも可能なんです。ジャン＝リュック・マリオンなんかは愛ということで、ハイデガー的な存在から愛に転換して、実体化を越えようとしている。存在神論超克のいろんな考えがあるわけですが、私はどうしてもアリストテレスとかトマスをやったので、存在からすぐ善とか愛に、ぼんといけな。やっぱり何か存在論的なものを手がかりにし

ようとしていたときに、幸いなるかな、旧約聖書をヘブライ語で読んだ期間もあったので、セム語というものを媒介にすると、何か実体を越えるような手がかりがつかめるんじゃないかとハッとひらめいた。そのひらめきの元は、学生時代から読んでいた有賀鉄太郎という京都大学の歴史神学の先生が提唱された、ハヤトロギアだったんです。それはギリシア語の発想と違って、ヘブライ語にハーヤーという動詞がある。これは完了動詞なんです。それで、ハーヤーという動詞に有賀先生は目を付けられたんです。このギリシア的インド・ヨーロッパ語と、どこかヘブライ語は違う。それはどう違うかという、ヘブライ語の場合は行為が動詞の基準になってくる。行為が終わるとみると完了形が、行為がまだ終わってなければ未完了が用いられる。だから、将来、この行為が終わっている、必ず終わるということが分かれば完了形を使ったりするわけです。対して、インド・ヨーロッパ系というのは、文法書を見ると過去、現在、未来という、そういうふうな時間軸で、時制で動詞の変化が決まってくるわけですが、ヘブライ語というのは時制じゃなくて行為が基準になる。

中島 アスペクトが関わってきますかね。

宮本 ええ。そしてインド・ヨーロッパ言語の特徴は、必ず be 動詞で主語 (S) と述語 (P) がつながれて命題ができる。最低の表現が命題化され得るといふ。S est P という具合に、S と P に、必ず、「である」というのが入ってくるんです。

だから、「である」を離れては、インド・ヨーロッパ語の世界というのは成立しない。その「である」ということの背景を深めていくと存在論になるんです。On 存在とは何かを問う、存在論になります。アリストテレスによれば、存在とは何かの問いは、結局、実体とは何かという。ウーシアですね。サブスタンスとは何かという問いに帰着するというわけです。サブスタンスは同時に財産の財という意味を持っている。大雑把にいうと、ギリシア人は結局ポリス社会をつくる。そこでは法律を作って、自由人は私有財産制が認められる。ギリシアもローマも私有財産を基に、奴隷制社会を構築してきたし、結局、後世の資本主義だとかいったって、その延長線上で私有制というものを基盤にしている。資本主義社会というのは、私有制に自由競争

という概念が加わってできるとすれば、競争に勝った強者が一切を所有しようとするので、どうしても全体主義という方向に行きやすいわけです。それを克服するには、ハーヤーがいいんじゃないかと。有賀先生は、「ハーヤー」が意味する「生成する、働く、在らしめる」という非実体的で動的歴史創造的な特徴に注目された。

それで、有賀先生はハヤトロギアによって、そういうギリシア的な実体論というのを越え得るというんで、歴史神学の中でヘブライ思想の性格をハーヤーからハヤトロギアと名付けられたんです。それに私は触発されて、最初はハヤトロギアを使っていたんですが、有賀先生と問題意識が随分違うのに気付いた。先ほど申しましたように、私の方は根源悪だとか存在神論をどう越えていこうか、どう共生社会を実現していくか。相生と言うほうがいいかもしれないですね。相生かし、相生かされ、相生く。それに向けての問題意識なので、有賀先生とは違う。しかもハーヤーは完了形なので、未来を披く未完了形エヒエを強調してエヒエロギアを造語したんです。加えて聖書のテキストを聖書学的視点で扱うんじゃなくて、ナラトロジー（物語り論）という立場で扱う。すると普遍性が出てくるわけです。ナラトロジーというのは何でいいかという、普通アカデミズムというのは論理的な言語、概念言語を使って、それは一般の社会の人には分からない。日本の哲学の翻訳の言葉は、普通のおじさんおばさんなんかの心には入らないですよ。東大、あるいは大学の哲学科で取り上げるくらいなもので、やっぱり依然輸入ものであることには疑いがないわけで、一般社会にまで普遍化されていない。

そういう意味で、存在神論超克のためには、従来のヨーロッパ哲学、インド・ヨーロッパ語に基づく思想に依存できないというので、結局、ハーヤーだと完了形だから、エヒエという未完了に基づくエヒエロギアを構想したのです。エジプト大帝国から奴隷が脱出した「出エジプト記」物語りが聖書にあります。その3章の14節に、神の名前というのが出てきます。これがエヒエ・アシェル・エヒエという翻訳不可能な、つまり「われはあるだろうところの、われはあるだろう」だとか、「われはあるだろう、故にわれはあるだろう」だとか、いろんな翻訳が可能な神名なんです。この、われはあるだろうと

いう、エヒイエというものが、結局、ヤハウエ神の名前になっている。あるいはヤハウエ神そのもの。名前というのは、まさに、そのものを表わす・現わすといわれるわけです。

だから、エヒイエによって実体的な方向を越えていく。つまり物語論的に「創世記」だとか「出エジプト記」だとかを解釈していくと、物語の中でエヒイエがどういう役割と働きをするかということが明らかになってきます。つまりエヒイエは、絶えず他者に向かっていくんです。貧しい弱い他者に向かってエヒイエが自分を越えていくという、そういう構造を持っている動詞であり、その動詞が「出エジプト記」物語りの中でどう振る舞っていくかということ、奴隷を解放し、そして解放した人々と契約を結ぶんです。契約を結ぶことによって新しいカイロス、奴隷が自立してゆく開闢の時代をつくっていく。

だから、ヤハウエ神・エヒイエは次々と契約を結びつつ歴史の大きな筋を創っていく。エヒイエというのは、ですからリニアじゃないんです。リニアな、線条的な、過去、現在、未来という時間軸における物語とか歴史じゃなくて、何者かと出会って新しい世界が展開する、その展開、これをカイロスというんですが、そのカイロスを新しく積み重ねながら歴史を創っていくという意味で、エヒイエというのは歴史とも非常に深く関わる動的創造者です。そのエヒイエによって根源悪の現象——私が根源悪の現象というのは先ほど申しましたようなアウシュビッツとかエコノ＝テクノ＝ビューロクラシー、つまり現代世界を支配している経済・技術・官僚支配形態、それから原子力発電所だとか原爆を生み出すために、官僚からお金から技術から資材から政治から、全部を投入してそういうものを造るシステム・巨大科学などを指します——を乗り越えていく。そういう意味でエヒイエロギアを深めよう、構想しようとしているわけです。

だから、私にとって重要なのは聖書の物語だけじゃなくて、これまで水俣病の物語とか宮沢賢治文学だとか、さらにアレクシェーヴィチの『戦争は女の顔をしていない』などを取り上げているわけですが、つまり他者とどう出会うかということ掘り下げた文学とか、あるいは伝説だとか伝承、あるいはまだ埋もれて掘り返されていない、そういう話を掘り返しながら、そこに、私はエヒイエの響き・声を読解で

きるんじゃないか、つまりエヒエと本当に共鳴する人間性とその歴史の声を、聞けるんじゃないかと思うわけです。

それで、ヘブライ語には、インド・ヨーロッパ言語が中心とするコブラという概念、何々であるという動詞の三人称現在形は存在しないんです。コブラは存在しない。だから動詞だとか名詞を並べ「である」を超えていくわけですけども。それからレヴィナスがよくタルムード講話でやっているように、ヘブライ語の場合は子音しか書いていない。母音は書いていなくて、母音をどう打つかで意味だとか文章の区切りも変わってくるんです。ですから、ラビ・ユダヤ教というのは、非常に自由な解釈をするわけですが、その自由な解釈の中心というのは倫理的な解釈です。レヴィナスもやっていますが、つまり他者とどう関わっていくかということ、その時代その時代に解釈していくというのがラビ・ユダヤ教の解釈であり、レヴィナスのタルムード解釈に典型的に現れていることなんです。そういう意味でも、ヘブライ語聖書の新しい解釈を、レヴィナスとかタルムードに習いながら深めていくということも課題ですし、それから日本語が持っている独特な、インド・ヨーロッパ語でもセム語にもない文法や物語る仕方や発想などはどうなのかを学びたい。日本語は主語も述語も落として語るめちゃくちゃ面白い言葉であります。そういう日本語をどう考えていくかということもやりたいんですが、もう後期高齢者で命が尽きかけているんで、いつまで学べるかどうか分からないです。

ソーマの問題の追究

中島 宮本先生がよくおっしゃるんですが、「譬え話というのは半分できた話で、残りの半分はそれを聞いた人が作るんだ」と。これは本当に印象的なフレーズだと思うんです。まさに、それを先生はナラトロジーの中で実践されているという気が、私はしています。この『パウロの神秘論』を拝読して特に印象的だったのは、身体的なものに対する先生の感覚、それがさらに深まったんじゃないかというふうに思うんですが、そこはいかがでしょうか。身体の変容の問題というんですかね。

宮本 これを一番最初に私が教えられたのは大学生の頃で、加藤信朗先生が書かれた「Cor, Praecordia, Viscera」「心（心臓）、横隔膜、それから内臓（はらわた）」というアウグスティヌス解釈の論文からです。アウグスティヌスが回心するときに面白いことは身体の変容が伴う。キリストというのは神のロゴスというんで、パウロとかの、聖書の言葉も含めて、キリストが、まずはらわたに宿った。はらわたというのは人間の欲望とかそういうものの座で、次は、ロゴスがはらわたを清め突き抜けて、横隔膜に至る。今度は横隔膜を破って心臓を、ちょうど城を軍勢が取り巻くようにして神の言葉は取り巻いていく。最後に、この神の言葉が心臓に入っちゃうわけです。そのときにアウグスティヌスは「Amavi te」、「あなたを愛した」と言うんです。つまり回心です。

ですからアウグスティヌスの回心というのは、はらわた、横隔膜、心臓という形で、神の言葉が突き破って行って、清めて、変容させていくという、身体的な変容と同時に生起する。回心は、精神的、心理的、生理的な変容が全部伴うようなものだという。この論文はドイツ語だとかフランス語に訳され、世界的な論文になったんです。それまでのアウグスティヌスの身体論というのは、彼は若い頃マニ教や新プラトン主義を信奉していたので、身体に対して非常にネガティブな態度しか取らなかったというのがそれまでの説なんですけど、加藤さんは、それをひっくり返した。

それで私もパウロを読んだり、それからソーマ論をいろいろ読んで行って身体（ソーマ）に非常に興味を持った。そこで、一体、キリストとか他者と本当に出会うということはどういうことか、その出会いの場はどこかという問いを身体的に攻めようというんで、ソーマを特に強調したかったのです。

中島 じゃあ『パウロの神秘論』で初めてソーマの問題が登場したというよりは、加藤信朗先生のPraecordia からだったのですね。これは私も、学生のときに先生から教わって……

宮本 そうですね。

中島 だから、これは相当長い時間をかけてお考えになってきたテーマでいらっしゃったわけですね。

宮本 アウグスティヌスも、パウロから学んでいると思うんです。

中島 パウロから。

宮本 聖書自体がギリシア思想と違って、精神と身体という区別をしないですよね。ソーマというのは身体と邦訳されるんですが、むしろ、この身、身の方がいいですね。ソーマには人間存在全体が含まれているけれども、ソーマではこの身という身体的な面が強調されている。他にサルクスという言い方もあるんですが、パウロとヨハネの用法は違う。聖書は人間全体をいろんな角度から見ている。

若者へのメッセージ

中島 今、この地点で、宮本先生が日本の社会をご覧になったり、あるいは世界をご覧になったりして、若い人にはどういうメッセージを残されたいと思っていらっしゃいますか。

宮本 そうですね、やはりソクラテスかな。ソクラテスのように自分とは本当は何者なんだろうかということ問い詰める。しかし自己とは何者かと問うときに、ソクラテスのように魂の方向ではなく身体も含めた自己の全体性を見ていく。そして自己とは何者かというのが本当に分かるのは、他者を愛するとき。愛と密接に関わると思うんです。だから、若い人は特に、他者と出会う最初というのは恋愛だと思うんです。だから恋愛を非常に大切にするというのか、ただ、ほれた好いたじゃなくて、自分の自我とか自己中心主義が破裂するような、そういう恋愛です。

中島 なるほど。宮本先生は、*Sacrae Theologiae Magister* という称号をお持ちです。これはトマス・アキナスと同じ称号です。やっぱりドミニコ会の何か未来に対しても、いろんな責任を負っていらっしゃると思うんですが、どういう方向に向かっていこうと、今はお考えなんでしょうか。

宮本 たまたま私がドミニコ会という国際的なソサエティというか集団に属しているのは、とても良かったと思うんですが。4年に1度、全世界から集まってきて総会をやるんです。それで、5~6年前はイタリアのボローニャで開かれた。冗談ですが、食事がちょっとひどかった。

ひどかったというのは朝から晩までスパゲティじゃなくて、イタリアの……

中島 パスタですか。

宮本 パスタで。要するに、われわれが払う月々のお金から、宿賃や食事からいろんな技術者の雇用費から交通費から、様々な人の招待費など全部出るんで、しわ寄せが食費にかかってくるんです。ボローニャというとパルマハムの有名な近くですよ。

ボローニャだからパルマハムを毎日食べられるんだと夢見ていたら、絶対出てこなかった。それでまず安いパスタでしょう。野菜は、いろんな野菜屋さんの、その日の余りを持ってきてサラダにする。スープもそうです。けれど素晴らしいのは、ボローニャの総会には、北米だけでなくラテンアメリカから、アフリカ、中東、もちろんインド、アジア、ヨーロッパなどの全地域から、代表者が集まってくるわけです。それで、私は日本の代表として行ったわけですが、まず感じたのは、南米はほとんどが経済的な意味での貧困者と……

中島 格差が生じている。

宮本 独裁者というか金持ちとの格差で、ほとんど暴力的に収奪されています。それを向こうで神父になっている連中は、各地域での暴力的なことを、レポートにまとめて報告するわけです。中東は中東で、イラクなんて古い2~3世紀から続いているキリスト教のグループは今、殺されて絶滅状態です、とか、そうしたいろんな報告があるんです。アフリカはアフリカで、貧困、宗教紛争などの報告があつて。それを聞いていますと、世界中が暴力に満ちているというのが大体のみんなの印象です。もちろん地域差があつて、地域で暴力の質が違うわけです。先進国では麻薬だとか精神的な暴力、DVだとか、そういうものも入るわけです。

それで、じゃあどうやってこれに対処しようかと、次の段階で、みんなで相談し合うわけです。そういう相談の中で、地域の教会で家庭的なグループをつくって、暴力の被害者、弱者などどうしようもない人びとをそこに受け容れる。あるいはいろんな地域に出て交流し反暴力の活動を活発にしようと。今の教皇だって、本当に日本の山谷みたいな所で働いていた人ですから回勅『ラウダート シ』、『愛するアマ

ゾン』などを出し、人類がともに暮らす家である地球を暴力から守ろうとしている。私がかつて聞いたのは、そういう非常に貧しい所で働いていた神父と、神父さんのボランティアが5人くらいいて、みんな政府軍に捕まっちゃった。そのうち、神父さんはアイルランド人で、ちゃんと外国籍があるから大丈夫だったんだけど、他のボランティアの人はどうも飛行機に乗せられていって、ジャングルの上から落っこことされた。独裁者はそうやって抹殺していくわけです。それをアイルランド人の神父は聞いて、ワシントンで何かの集会のときに南米のその国の人に訴えていたら、みんな聞く耳は持たない。

だから、そういう暴力からどうやって、善き相生の社会をつくろうかという話し合いが、次のステップですと語られています。日本とは随分違ういろいろな問題が出てきたんですけども、そういう意味では、それら底辺の厳しい問題は普通のインターネットじゃとても出てこない。私はインターネットはできないんですが、昔から心掛けていたのは足で歩くこと。つまり、インターネットでは情報に乗っかるものというのは、おそらく、あるレベルから上のことです。いま話したような底辺の話は絶対に乗ってこない。それは歩いて発見していくよりしょうがないんです。そういう意味で、日本のマスコミの人とかは努力が足りない。歩かない。むしろニュースを買うわけでしょう。だから、どうしても、いろんな声を聞くということ、それは重要なことだと思いますし、若い人にもう一つのメッセージがあるとすれば、自分の足で世界のつらい所を歩いてほしい。

そうして辺境を歩いて命の危険があって殺された日本人もいるわけですが、そこまでやるのは大変でしょうが、しかし、問題の地域の近くまで行けば分かるわけです。若人のエネルギーでそういうこともやってほしいと思います。

中島 きょうは宮本先生が足で歩まれた歩みを振り返って、伺うことができました。最後にどうでしょう。学問的には、エヒエロギアというのをこれからも深めていこうということでしょうか。

宮本 ええ。深めていきたいと思います。これまでと同じように根源悪の問題を新しく深めて、それをどう超えるかということを追究したいと思います。今度出版する予定の本では道元だとか良寛のことも随分書き

ましたが、それが出版されたら次に、体力があったら書き下しでエヒエの力に乗じて何かエヒエロギアに関して百尺竿頭一步を進みたいと思います。ぜひともご協力をお願いいたします。

中島 今後のますますのご健筆をお祈りしながら、きょうの対談を終えたいと思います。きょうはどうも、ありがとうございました。

宮本 ありがとうございました。

あかい
月日 から咲く花

対談の後に

時に適う出会いは幸さきはふ

宮本久雄

中島さんと出会ったのは私が駒場の教師生活一年目でした。対談で語られたように中島さんは、私の小さなゼミで、ラテン語やギリシア語のテキストを深読し、その後ギリシア語はほぼ完全に習得されたと存じます。そればかりか、さらにフランス哲学や終生の友となった中国哲学の研究に転身されました。その中国哲学もいわば明るいフランスやギリシアの思惟に照らされてとても斬新な解釈に輝いたと思います。そうした学びを背景に今日も東大EMPでユダヤ教・イスラム教・キリスト教の三大宗教が現代のつきつける問題にどう応えるかという鼎談を爽り豊かに導いてくれています。その人間的ふところの深さと見識の広さにささえられて、今回私も拙い人生の一こま一こまを語ることができました。

ここでその再考のために「時」について一言語らせてください。

ある聖書研究者がイスラエルの荒野に迷い込んで、必死にバス停のある幹線道路を探しました。やっとバス停に近づくと三人の（アラブ）人が紅茶を飲んで談笑しており、彼を招待しました。薄暮も迫り彼は気が気でなくバスの到着時間を尋ねたわけです。と一人が「いやあ、バスがやってくる時がその時だよ」とのんびり語ったのです。ヘブライ語聖書を学んでいた彼はその時愕然としました。「何ごと（事・言）にも時カイロスがあるのだ」という聖書の言に気づいて（コヘレト三章）。現代人は暦や時計で定められた（と思いついでいる）時を時間として、それによって日々の計画や行動を決めています。そういう時間は何か予測もつかない出会いをもたらさない、のっぺらぼうのようなもの。真実の私の姿を見えなくしている。逆にかけがいのない顔（他者）に見える出来事まみとその時に身（ソーマ）をおけば、そこに私が現成し、

様々な出会いが性起する、と思うのです。

中島さんの静謐な対談姿勢に支えられて私が語った人生の一節、一節が、
時 ^{カイロス} だったという感慨深さに今はひたれます。その時の流れにおいてまたエ
ヒエロギアが開關的展開を遂げることを願っています。

最語に以上の対談のなにごとかがどこかで読者諸氏の生と心の琴線に触れ
共鳴し合えればこれに過ぐる幸いはありません。感謝。

燈燈無尽

宮本久雄

対談の後に

宮本久雄先生への学恩

中島隆博

宮本久雄先生は、わたしが大学入学した年に駒場に赴任されました。その迸る情熱に溢れた授業をとった興奮は今でも忘れることができません。人数は必ずしも多くない授業でしたが、先生のご経験を踏まえた上でのヨーロッパ哲学、キリスト教、そして仏教に関するお話は、若い学生の血となり肉となっていました。

無謀にも、先生の少人数の授業をとったこともありました。ラテン語でトマスのテキストを読解するのですが、ラテン語など履修したこともない学生にとっては本当に大変な授業でした。学生一人と、当時の大学院生と助手がそれぞれ一人という三人の受講生でした。しかし、それがどれだけの素晴らしい時間であったか、今でも時折思い起こします。

その後、課外でギリシア語聖書を読んでいただく機会も作っていただきました。旧二号館の古い建物の中で、ストーブを囲みながらゆっくり読んでいき、宮本先生のお話を聞くのは何ものにも代え難い贅沢な時間でした。

旧約聖書をヘブライ語で読むことにもチャレンジの機会を与えていただきました。ちょうど新共同訳聖書が出た頃で、その旧約を担当されていた先生のもとで学ばせていただいたのです。

このようにギリシアや中世キリスト教神学を学ばせていただいたために、中国哲学に進学した際には、先生は一瞬驚かれたようでした。それでも、せっかく選んだのだからその道をしっかり極めてくださいよと背中を押していただいたことも忘れることはできません。

その後も、先生とは折に触れてお目にかかっておりましたが、駒場にわたし自身が赴任することになって、一緒に UTCP で活動することになったこ

ともあって、しばしばさまざまな活動にお声がけいただきました。京都フォーラムで一緒したことや、震災後に上智大学のシンポジウムにお呼びいただいたことなど思い出します。

こうして振り返ってみますと、宮本先生こそがわたしにとってはかけがえのないメンターだったということがよくわかります。その先生とこうしてダイアログの機会を得ることができ、弟子としては望外の喜びでした。

宮本先生は毎年陸續と大著を出し続けていらっしゃるようです。その知的なインテグリティがどれだけ高度なものなのか、このダイアログからその一端が見えるのではないのでしょうか。今後もますますご活躍いただきまして、後輩たちを背中から引っ張っていただければと思います。

この場を借りて、あらためて学恩に感謝したいと思います。

2021年11月

中島隆博

対談者について

宮本久雄 (MIYAMOTO, Hisao)

東京大学名誉教授・上智大学名誉教授・東京純心大学看護学部教授。研究分野は、哲学、キリスト教学。著書に、『福音書の言語宇宙——他者・イエス・全体主義』（岩波書店、1999年）、『他者の原トポス——存在と他者をめぐるヘブライ・教父・中世の思索から』（創文社、2000年）、『存在の季節——ハヤトログア（ヘブライ的存在論）の誕生』（知泉書館、2002年）、『旅人の脱在論——自・他相生の思想と物語りの展開』（創文社、2011年）、『ヘブライ的脱在論——アウシュヴィッツから他者との共生へ』（東京大学出版会、2011年）、『出会いの他者性——プロメテウスの火（暴力）から愛智の炎へ』（知泉書館、2014年）、*La Résurrection de l'autre: L'exode d'Auschwitz* (ATF Press, France 2018)、『パウロの神秘論——他者との相生の地平をひらく』（東京大学出版会、2019年）など。

中島隆博 (NAKAJIMA, Takahiro)

東京大学東洋文化研究所教授・東アジア藝文書院院長。研究分野は、中国哲学、世界哲学。著書に、『残響の中国哲学——言語と政治』（東京大学出版会、2007年）、『ヒューマニティーズ』（岩波書店、2009年）、『莊子——鶏となって時を告げよ』（岩波書店、2009年）、『共生のプラクシス——国家と宗教』（東京大学出版会、2011年）、『悪の哲学——中国哲学の想像力』（筑摩書房、2012年）、『思想としての言語』（岩波書店、2017年）、『危機の時代の哲学——想像力のデイスカール』（東京大学出版会、2021年）、共著に『日本を解き放つ』（東京大学出版会、2019年）、『世界哲学史』（全8巻＋別巻、ちくま新書、2020年）など。

*この対談は、2021年3月31日、東京大学 EMP ラウンジで行われました。

EAA Booklet 22

EAA Dialogue 8

Hisao Miyamoto × Takahiro Nakajima

[宮本久雄 × 中島隆博 2021年3月31日]

著 者 宮本久雄 中島隆博

発 行 日 2021年11月25日

発 行 者 東京大学東アジア藝文書院

製作協力 一般財団法人東京大学出版会

写真撮影 立石はな (EAA 特任研究員)

デザイン 株式会社 designfolio / 佐々木由美

印刷・製本 株式会社真興社

© 2021 East Asian Academy for New Liberal Arts,
the University of Tokyo



EAA Booklet - 22

Dialogue 8

Hisao Miyamoto × Takahiro Nakajima

[宮本久雄 × 中島隆博 2021年3月31日]

